

ハーンと想像力

高 木 大 幹*

Hearn and Imagination

Taikan TAKAGI*

I

ハーンの来日後、最初の作品は『知られざる日本の面影』であるが、それに入っている「英語教師の日記から」はハーンの人間性が如実に現れている名篇として有名で、それは日記文学というジャンルを通して、ひとつの文明批評としても極めて高い価値を有するといえる。ハーンは今から丁度100年前——それまでは40年近く欧米にありながら心の奥では常に母への慕情もあって東洋に憧れていたが——ついに時を得て極東の日本に到来、出雲という神々の国に身を置き、松江の尋常中学校と師範学校で英語を教えることになった。これも考えれば不思議な運命のいたすところで、アメリカでジャーナリストであったハーンが、バットンという『ハーバーズ・マンズリー』誌の美術主任記者とのひょっとした交際から親しくなり、たまたま日本のことが話題に上り、話が進んで日本への特派員として送られたわけで、いうなれば偶然という契機による来日であった。ところが、いざ日本に来て見て驚いた。初めて東洋文化の中にどっぷり身を浸し、ハーンはその異質文化の魅力に完全に圧倒された。ハーンの放浪精神は東洋、わけてもこの島国、日本の伝統と文化、民俗などのひとつひとつにこの上なく惹きつけられた。同行して派遣された挿絵画家ウェルドンに向ってハーンは「自分はここで死にたい」といった。ウェルドンは「ここで生きたい」と答えた。私は二人の会話の意味の落差に注目したいと思う。ハーンは既に命をかけたのである。日本という長い歴史と文化を有する複雑な国の研究はハーバーズとの短い契約期間では不可能だと痛感し、またウェルドンやその他ハーバーズとのいろいろな条件を考慮すると自分がひどく不利な立場に立たされていることを初めて知り、ハーンの心は動揺した。彼の性格としてこれは許しがたいことであった。絶縁。そこで新しい職を日本で求める仕儀となり、マクドナルド、チェンバレン、服部一三などの斡旋により、たまたま口のあいていた松江の尋常中学校の英語教師になった。松江中学というのも偶然の契機によるもので、ハーンがそれ以来、日本との深い深い関わりを生じるには、こうした二重の偶然という契機を踏まえていたのは、まことに興味深く思われる。だが、見逃してならないのは、ハーンの来日には偶然という因子は含まれて

*外国語系列 (Department of Foreign Languages)

はいたものの、ハーン自らの意志が大きく作動していたことだ。私はハーンは一生のうちで二度、大きな賭をしたと思う。一度は、ヨーロッパからの渡米であり、もう一度はアメリカからの来日で両方とも大きな海を渡っている。

さて、われわれはその「英語教師の日記から」（英文で60頁のやや長いものだ）を読んで、よくぞ新来の西洋人がこれほどまでに日本の心に関心を抱き、早くもその本質に鋭く迫っているものだと思嘆せざるを得ない。私はこの日記の中で、ハーンが指摘した日本人の想像力を取り上げ、そのあたりから考察を進めてハーンの想像力説とは一体何人であるかを探してみたいと思う。

II

「英語教師の日記から」の第14節に次のようにある。ハーンは生徒の自由英作文を見て、そのいずれにも全く個性がなく、20篇の筆蹟までが似ているのに驚いた。同じ題の作文30篇を読んで、それらに見いだされるのは同じ思想であり、同じ比喩なのだ。これは一体どうしたことか。日本の生徒の想像力の貧しさ。それは日本の教育法に由来するものだといって、いろいろ具体例をあげて説明している。大いに説得的で親切である。それは動かすことの出来ぬ大きな欠陥を教えてくれたものだ。感謝すべきである。だが、原因はそれだけであらうか。私はこれにはもっと深いものが潜んでいるやに思われる。これは想像力を含めて、東洋と西洋の強い思惟の内容と思考方法という根本的なものにつながる大きな問題を抱えこんでいるのではないかと思われる。

III

想像力の起源は確定しがたいが、アリストテレスの『詩学』は考慮されてよいものであろう。あのミメシス論。これはエリザベス朝でもシェイクスピアなどは別として、大方の者は字面の「まね」という意味に捉われていたが、本来は単なる物まねではなく、理想的創造の意で創作想像のことであった。ハーバート・リードが『英国散文論』にて、C. O. D. を引用して、想像とは心の想像的能力だといっているが、それに近いものといえよう。

次に、われわれはルネッサンスの入口に大きく立つダンテを忘れることは出来ない。『神曲』。人は誰でもこの偉大な作品を読む時、地獄・煉獄・天国の三界を経巡るダンテの強靱な想像力と芸術の極度に高められた合一性に驚嘆せずにはおれない。とにかく大きくて深い。寿岳文章博士は畢生の完訳『神曲』、その解説「ダンテ」において、『神曲』の内容、これをどうとらえるかは、読む人の立場立場で力点の置き方が変わるとの意を述べていられるが、通じていえることは、ダンテの構想力の絶大さと愛の根源的な強さであらう。この作品は人間の想像性の極北を示すものである。

今世紀において想像力について最も重大な発言をしたのはサルトルで、『想像力』（1936年）とその4年後に出された『想像的なもの』は大きな問題を投げかけた。西洋思想史で厳密な意味か

ら想像力論を云々するならば、それは近代においてということになろう。『想像力』がデカルトからフッサールまでを扱っているのを見ても分る。サルトルの主要な関心はイマージュの問題であったが、それについて梅原猛氏は『哲学の復興』にて、サルトルは像を知覚から峻別しようとするのだが、これは彼の哲学の出発点が古典的模写説からの解放にあったことを物語るのであろう。サルトルは像形成の作用、想像力に、知覚に匹敵する認識論的位置を与えようとするといい、そして例の有名なピエルのくだりを引き出し、われわれが今ここにいないピエルを想像する時、われわれの意識は二重の無化を行う。ピエルの前にはこの現実は無であり、この現実の前にはピエルは無であるという無化の作用が想像力には伴っていると鮮やかな説明を与え、このような無の意識は知覚の場合には入ることが出来ない。知覚の場合は、あるものをそのままうつすにすぎないが、想像の場合は、いつも、ありのままの現実を否定する否定作用があるとする。そして梅原氏は、サルトル理論の最も問題となる点は、知覚作用と想像作用の区別ははっきりつけたが、その関係をはっきり考えなかったと、よい点をついていられる。私も全く同感で、そのことが、ここ数年、問題意識として頭にこびりついて容易に離れないのであった。そしてハーンを読んでいながら、想像力に言及しているのが非常に多いことに気がつき、ハーンの想像力とは一体何なのかを問うにいたり、それには想像力そのものの概念を得る必要があると考え、その方面の本をいろいろ読み漁り、想像力にすっかり興味を奪われた。英国文芸批評史のみならず西洋思想史においても、それは大変な問題でその領域の広さと、時代による理念の移り変りに頗る心をかき立てられた。

最近、野間宏氏の『サルトル論』を読んだが、これは出色のものだと思った。氏はメルロ・ポンティに近い立場からサルトルを批判し挑戦したというべく、私の問題意識にも触れる面があって大いに参考になった。同書にて氏は、サルトルは想像力と知覚の二つを峻別し、その上で芸術の世界から知覚を追放し、もっぱら想像力によって芸術作品の創造がもたらされることを示そうとして弱点をあらわしたとし、ついで、ルフェーヴルに言及、彼はサルトルとは逆に芸術作品の創造には想像力の重要さは認めながら、もっぱら知覚の働きにその根拠を置こうとしたとし、野間氏はそのいずれにも賛成せず、知覚と想像力の統一によって芸術作品の成立を考えるほかはないと主張する。そして、知覚の想像力に対するたたかいと、その逆の、想像力の知覚に対するたたかい、この二つのものが互いに浸透しあうところに芸術作品の創造が行われることになるという。氏のこのダイナミックな論理は私の問題意識にひとつの突破口を与えてくれるやに思われた。メルロ・ポンティは想像力に関して知覚・想像力両方の未分化の領域、たとえば幼児の線描はサルトルの理論では説明がつけられないとし、知覚と想像力の分離されない次元が大切だということである。ここだけを見れば、野間氏の意見はメルロ・ポンティと極めて近距離にあることが分る。

IV

英国思想を語る場合、われわれはベーコンを省くことは出来まい。だが、帰納法に依拠する理

性の人ベーコンは、想像力は物質の法則に拘束されないので、事物の法則に反していろいろ行動するから感心しないという立場にある。しかし、想像力を理性や悟性に先行すると見た点など、コールリッジに水脈がつながると考えられる。

シェイクスピアはどうか。一例をあげるにとどめるが、『夏の夜の夢』5幕1場で、

「詩人の眼は恍惚たる靈感のうちに見開き、
天より地を眺め、地より天を望み、
かくて想像力が、曾つて知られざる物の
形を生み出すとき、詩人の筆が
その面影を写し出し、空霊なるものに
居所と名前とを与へる。」(土居光知訳)

と想像力という言葉を使っている。試みに Schmidt の *Shakespeare-Lexicon* を引いてみると、シェイクスピアは *imagination* という語に、想像、奇想、妄想および記憶等々いろいろな意味を付して使いわけているのが分るのである。シェイクスピアの想像力については後でハーンのところで触れてみたいと思う。

18世紀の古典主義時代のアディスン。彼の想像力説はセインツベリー教授が『英国批評史』で指摘したように、視覚的経験に最も多く頼ったという難点はあるが、想像力の楽しさ、すなわち視覚経験を通して絵画や風景のイメージを記憶にとどめ、それらを様々に分解したり結合したりして想像の喜びを得ることが出来るとする。アディスンの理論は必ずしも論理的でなく素朴な面があるが、岡本昌夫博士は『想像力説の研究』の中で、「アディスンによって当代の批評精神は古典主義からローマン主義へ一歩前進したことは確かだ」と述べていられる。

18世紀文壇の大御所、ジョンソン博士については、想像力に関して特に取り上げていうほどのこともないように思われるので一気にコールリッジに飛び、ハーンへと急ごう。

私はコールリッジはとても一筋縄ではいかぬ複雑にして巨大な存在だと思う。『老水夫行』『クリスタベル』『クブラ・カーン』を読んでから、『文学評伝』や『シェイクスピア批評』などに見たると、あの幻想性の世界から実に難しい文学論や哲学的論考に辟易とせざるを得ない。ハーンは『英文学史』において、コールリッジを先ず、「全身これ心、空想、想像力」の人として捉えている。そして上に出したコールリッジの詩について、それらはすべて夢だという。これはいかにもハーンらしい着眼で面白い。コールリッジと夢については、C.M.バウラが名著『ローマン的想像力』にて、「コールリッジが、彼の想像力がいろいろ創り出すものについて、夢に関して感じるのと何か同じものを感じていたというのは明らかだ。……『老水夫行』は夢の中の出来事と同じくそれ独自の世界を持っている。……別言せば、コールリッジはわれわれの夢の経験に訴えることによって始めるのだが、彼がわれわれの夢の経験を利用するのは、最も忘れられない夢よりもなお確かで、なお理にかなった、そしてなお人間的なある物を表現するためだ。」と書いているが、もし、夢を好むハーンが生きていてこれを読んだら快心の笑みを洩らすことだろう。

『文学評伝』第13章のコールリッジの想像力説。第一の想像力説と第二の想像力説は余りにも

有名なので、あえて引用するまでもないが、ただいえるのは、第一も第二も本質的には同じであって創造的能力のことなのである。違うのは、その働きの程度と様式が異なるわけで、例えば、普通人では出来ないのに芸術家がすばらしい芸術品を創造するのは、芸術家の強い創造意志が加えられるからだ。それからもうひとつ。ハーバート・リードが『批評家としてのコールリッジ』で述べている有機体説。コールリッジは、想像力はその最高の能力にあっては生命的な何物かであり、機械的なものではないというのである。そしてそれは、『文学評伝』の「想像力の規則はそれ自体まさしく成長と生産の能力だ」ということなのだ。岡本昌夫博士によれば、ローマン主義の詩人や批評家は大人小なりコールリッジの影響下にあったといわれるが、たしかにコールリッジは偉大な存在であったと思う。

さて、私は、サルトルの想像力説と無縁ではない、いや大いにその影響を受けたと思われるハーバート・リードに少し触れて、英国の想像力説のいとも荒っぽいデッサンを終えたいと思う。

唐突かも知れないが、リードの『グリーン・チャイルド』という奇妙な小説を考えてみたい。奇妙なというのは、読んでみてこれが果して、いわゆるノベルと呼べるものかどうか疑問を抱くからである。第一、生涯に60冊ほどの著作をしたリードが小説らしいものを一冊しか、いや一冊書いているのが不思議である。これは小説としての軌範を脱し、まことに自由に時空を越えて思う存分、想像力の翼をひろげて書かれた作品である。構造的には三部に分れてはいるが、プロットの一貫性に欠け、いかにも寄せ集めという感じがする。リードは何故このようなものを書いたのだろう。私はこれは想像力と関わりがあるのではないかと思う。デカルト以来、ひたすら走り続けた西洋近代文明、余りにも合理主義的な科学技術文明。そうしたもののから些か逸脱して想像の世界に住んでみたいと筆をとったのではあるまいか。ローマン主義には常々共感を有していたリードのことだ。私にはこの作品はどうやら人間の意識下、深層心理にも、そっと触手を伸ばしているやに思われ、興趣をそそられた。リードはフロイトやユングに造詣が深いし、初期の評論集によれば彼は心理学の知識に基盤を置いて彼なりの想像力説を樹立しようとしたことがうかがえるのである。それから、私はリードに及ぼしたコールリッジの絶大な影響も忘れられてはなるまいと思う。おそらくリードの頭にはコールリッジの想像力説は常時こびりついていてと考えられる。されば、『批評家としてのコールリッジ』という名著が生みだされ、コールリッジの思想と現代哲学および深層心理学との関係が突っこんで考究されたのであった。

V

ハーンの『アメリカ雑録』（1924年）に「想像力芸術の哲理」と題するエッセイが出ている。これは1878年11月12日の「アイテム」に載ったもの。そして『西洋落穂集』（1925年）には、「教育における想像力」が書かれているが、これは同じ年の12月6日のもので踵を接して現れた感があり面白い。この頃、ハーンは何か想像力に取りつかれていたのであろうか。その後、想像力という言葉の入ったものは来日後、明治23年（1890年）10月26日に島根県教育会の総集会にてなさ

れた「教育における想像力の価値」という講演で、これは西田千太郎が病をおして通訳をつとめた有名な講演である。根岸啓二編『出雲における八雲』によれば、その原文は市河三喜博士の非常な配意により、すべての関係先が調査されたが、ついに発見されず、たまたま和訳掲載誌が、或る特志家の厚意によって東大英文学会に送られ、そこで海外のハーン研究者のために英訳出版され大変な賞讃を受けたのである。それは『英文学研究』第五冊（大正13年5月5日）に出ているが近頃は入手困難となってきた。なお、市河三喜博士『昆虫、言葉、国民性』によれば、その英訳というのは、中村鉄太郎の邦訳を学生の一人に忠実に英訳させ、それを市河博士が添削されたものである。

さて、この講演はさきの1878年12月6日のものと題名がほとんど同じだが、その間12年の隔りがある。そして場所もアメリカから日本に移っている。したがって両者には内容的に見て相当な開きがあるかと思って読んでみると案に相違して、基調は同じといってよろしく、講演の方がとにかく長いものなので、それに応じて内容は豊富になっている。「想像力芸術の哲理」は英文でも4頁の短いもので内容も私の小論にはさほど関係はないように思われた。そこで講演にフォーカスを絞り考察をすすめる。一応、講演内容の順を追って、問題としたい点を拾い上げてみようと思う。

(1)二、三世代前の歴史書を見ると、ただ年月日、名前、その他面白くない事柄ばかりで、さながら年代記のようだ。それが興味がないというのみか、今では全く役に立たない。しかるに今日、歴史は多くの事実や伝記を網羅するのみならず、すべて小説のように読めるのである。――

一見、これは想像力と無関係のように思われるかも知れないがそうではない。古い歴史書はただ暗記するより仕方のないものだが、現在のものは事実プラス伝記となり、さながら小説を読むごとしとは、まさにパノラミックということで、そこで読者は自ずとそれぞれ想像をめぐらし事件の展開に生彩を与えることになる。そしてこの手法はその精神において『英文学史』の講義にその影を鮮やかに落としているやに思われる。ハーンは西洋と異なる環境にある日本の学生に英文学を講ずるには先ず情緒や想像力を学ばせたいと考えた。ハーンの『英文学史』を読む人はハーンの親切さと良心的なのに驚くのである。われわれがハーンの講義を通して強く感じるのは、彼が英文学の解釈と鑑賞に全力を注いでいることで、彼は煩をいとわず小説の筋を語り、詩は彼の美しい散文に移し変えて学生にその意味を伝えようとした。私はそのプロセスの中にハーンが重視するイマジネーションの生動も、かなりの程度行われ得たと思い、その点でハーンは成功したといってよいであろう。想像力の中には多分に情動が含まれるからだ。そしてハーンの場合、それはロマンティックであった。ハーンがローマン主義者であったから当然なことといえよう。そしてハーンの『英文学史』で彼の本領が最も躍動して現れているやに思えるのは19世紀、すなわちロマンティズムが完成したヴィクトリア朝期ではないであろうか。ここにはハーンがあればどこまで親近感を抱いていたローマン詩人、テニスンもいた。われわれは『英文学史』を読んで巻を閉じる時いつも、これほどの講義を準備したハーンの労苦は大変なものであったろうと推察し、無量の感謝を捧げたくなるのを禁じ得ない。だが、ここに『英文学史』すなわち、history

はどの程度あるのだろうかと考えると一寸立ちどまりたくなるのである。ハーンの『英文学史』には真の意味での批評が欠けているという人もある。ということは、極言すれば歴史の不在につながりかねない場合も出てきそうで難しい問題になる。

（2）生物の変化は「体」においてのみならず「心」にも起るもので、心の変化によって同感とかその他の感情も生じ、そのすぐれている感情が一国の文明を増進することが出来るのである。われわれはそのような心の変化を想像と呼ぶのであって、繰り返していえば心に思うものを像化してみることである。自然の秘密を探りだすには、事実と事実との関係を知らなくてはならず、それらの関係を知るには想像力、すなわち心の像化能力に頼らなければならない。――

ここにはハーンの想像力説がある程度述べられている。ハーンは心の変化によって同感とか他の感情が生じるとし、それらを、よりすぐれた感情だといっている。心が変化して同感やさらに高次な感情や情緒が生じるというその裏には、ハーンが最も帰依していたハーバート・スペンサーのオプティミスティックな進化説がうかがえまいか。そして事実と事実の関係を知るには知覚と理性又は悟性が要求されるであろうが、ハーンはそれに想像力を連関させて図式的には知覚と想像力の統一をはかっている。こうしたハーンの想像力の論理は、20世紀後半の現象学的想像力説、メルロ・ポンティの理論に類似点を見いだせそうである。私はハーンのこの想像力説は進化論を踏まえながら積極性を宿し、有機的な全体性をめざすもので、そこに真の創造が生じるとしている点、大いに注目すべきものがあると思う。

（3）しからは、生徒に想像力を涵養するにはどうしたらよいであろうか。それには生徒をして遠慮なくどんな質問でもするように仕向けるのが最もよい。質問は想像力の蓄である。――

ハーンのこの言葉は貴重だと思う。ハーン自身、7歳の頃、カズン・ジェーンに、「何故、他の人の気に入るようにしないで、神様ばかりの気に入るようにせねばならないの」と突拍子もないことを尋ねて、信心深いミス・ジェーンを震え上らせている。ハーンのような神経質で天才的な少年には常に疑問が湧いており、想像力が躍っていたのであろう。15歳の頃、英国グラムのアショー・カレッジの同級生で後に同校の校長になったコルビッシュレーは、その頃のハーンについて、「少年にしては想像力は非常に進んでいた。英作文だけは抜群であった。……もっとも英作文以外は別に勉強もしなかったようであった。想像力を養成整頓するのに全時間を費していた」と書いている。並みの少年でなかったことは推測出来る。私は、およそ問いには好奇心が前提されていると思う。常識をすら疑う好奇心。その問いをつぶしてはなるまいと思う。人類文化の発展は巨大な矛盾に対する問いから始まり偉大な想像力の挑戦による謎の解明の所産ではなかったのか。太陽が地球をめぐるのではなくて、地球が太陽をめぐるのであった。ハーンならずとも、生徒や学生の問いはどんどん受けとめて、その中に彼等の未来像を捉えることが肝要ではないか。そこに想像力が奔騰し真理認識の道がひらけるのであろう。問いを通した想像の力学。そこには未知に対するすばらしい探険の原点があると思われる。ハーンは真に想像力を愛する人として終始したが、その道は孤独であり、ひとりの認識者として限りなき問いとの壮絶な戦いを一生貫いたといつてよいのである。

(4)日本人は実に美心が豊かで想像力に富む。そして日本人の旺盛な想像力と美的愛好心は古代ギシリア人のそれにほとんど遜色のないものである。――

ハーンのこの言葉を額面通り受けとってよいかどうか分らないが、私は想像力説について西洋と東洋では何故こうも異なるのかと思うことがある。日本において想像力論と呼べるものがいつ現れていたろうか。古代はもとより、中世、近世と辿ってみて、「論」として書かれたものの発見は困難のようだ。その理由として、渡辺広士氏の「想像力論の歴史」(岩波講座『文学』2)での、「可視的な世界についての学としての形而下学と不可視の世界についての形而上学の対立していなかったことにあるだろう」という東洋に関しての意見は大いに参考になる。無論、想像力説などある筈もなかった日本の原始時代、あの縄文期の出土品の想像性には全く圧倒される。日本人の想像力(想像力論ではない)には時に、すばらしい、いや、すさまじいものがあったといえよう。私は源信の『往生要集』を忘れることが出来ない。この本は見方によっては恐るべき想像力の本だといえる。源信自身が最初に述べているように本書はいろいろの経典から浄土についての文を適宜選集して、その三分の二はそうした引用から成り立っているのが分る。だが引用するにはそれなりの思想的根拠があるわけで、本書をしてわが国仏典の第一級書たらしめているのはその思想と想像力であろう。その実体は何か。極楽の実在証明であり、そこへ行く方法論である。源信はこの世は憂苦満つるものなるが故に徹底的に厭離して浄土を欣求せよという。源信の作といわれる浄土絵図を見る人は彼がいかに想像力に恵まれていたかが分るのである。『往生要集』は劈頭から地獄の凄絶な状景を繰りひろげ、われわれをして慄然たらしめる。何故これほどに恐ろしいのか。それはわれわれは今、地獄にあるということを想像を通して認識させられるからだ。今、人類は浄土にあるようなすばらしい状況には決していない。地獄の様相が地球を蔽っている。地球は病んで重体なのである。手を拱いていては人類は滅びるのである。この『往生要集』が日本人の心を捉え、久しきにわたり大きな影響を与えてきたのには、それなりの意味がある。この本の背後には源信自身の様々な人生体験が、たきこめられているのであらうと思われる。それは、クリエイティヴな想像力の多い作品、ミルトンの『失樂園』について平井正穂教授が、『イギリス文学ノート』で、「ある场景の描写の背後にうごいていたミルトンの想像力には、それまでの彼の人間のすべてがひそんでおり、一つの言葉を用いようと決意したとき、それは単に芸術的な決断であるのみならず、一つの宗教的な決断でもあったはずであらう」という意味に通う面があるやに思われる。勿論、仏教徒と想像力、ピューリタンと想像力、その径庭がどのようなものであるかは、ここでは問わない。

VI

ハーンは英文学の作者なり作品なりに、「想像力」という言葉を用いて、つまり想像力の見地からどのような反応を示し見解を述べていたかを重点的に辿ってみたい。先ず『英文学史』。

最初に想像力とかかわって顔を出すのはノーサンブリアの詩人キャドモンである。ハーンは彼

を豊かな想像力の人で強い感情があったと、感情に留意している。

中世ロマンス文学については、頗る広大な想像力の自由が必要だとし、中世の人々はギリシア人とは異なる方法、すなわち想像力を自由に駆使し、事実とたわむれるという方法で文学を作ろうとした。そしてこのような時代に自由な想像力により、それまでのヨーロッパ文学には見られなかった美しい空想や感情が出たとハーンはいい、その感情とは超自然の感情と優しさの感情だという。ここでは、ハーンにより自由と感情に力点が置かれている。そして英文学において想像力が枯れて、不毛な形になりかかると、新しい靈感を求めて中世の文学に戻るわけで、ジョンソン博士の時代、ワーズワスとその流派、コールリッジ、キーツ、ロゼッティ、ラファエル前派などみな然りという。

ベーコン。——彼はキケロとは何百年という歳月の隔りがあるにもかかわらず大変よく似ている。ベーコンもキケロも共に暖かい想像力と寛大な感情に欠けており、二人ながら上品ではあるが冷たく無味乾燥だとあっさり触れるにとどめている。

18世紀の劇の失敗については、古典主義は個人の傾向を押さえ、きまったお手本通りにするのが大切だから、こういう規則の下では喜劇は作れても悲劇は出来ない。そもそも劇というのは、別して大きい想像力と、想像力の高度の技巧を必要とする。だが、古典主義精神は想像力とは正反対であったという。ハーンはここでは想像力の大きさと、その高度の技巧を問題にしている。

ロマンティズム。——第一期の詩人、スコット、ワーズワス、コールリッジ、サウジー達と第二期の詩人、シェリー、バイロン、キーツ達とどこが違うか。ハーンはそのロマンティックな感情が違うという。第一期の詩人達は想像力は大いに働かせており、主題や形式は古典主義の因襲を破ったが、倫理性となると保守性を拭いきれなかった。彼等は極めて道徳的であった。第二期の詩人達となるとキーツはともかくも、バイロンやシェリーは因襲に全く捉われなかった。宗教や社会のしきたりなどには些かも尊敬を払わなかった。悪魔派と呼ばれる所以である。ハーンは想像力については両期の詩人の働きは評価している。

マコーレイ。——ハーンはマコーレイを相当高く認めている。チェスタトンが、『文学におけるヴィクトリア朝』にて、マコーレイをもって時代の転回点の筆頭とし、マコーレイでヴィクトリア朝文学が幕開きとなった旨、しるしている。たしかにマコーレイは文学者としても文明批評家としても当時の英国の代弁者であった。そのマコーレイについてハーンは、彼は古典主義的な特徴はすべて好み、この上なく美しい古典の文体を操る古典の大家であったが、想像力に訴えるその手法では全くロマンティストであったという。そしてマコーレイのような文が書けるには、彼のような精神を持たなくてはならぬが、そうした精神は1000年に5人か6人出るかどうかだという。ハーンはマコーレイにあっては、想像力に訴える手法を問題にしている。

デ・クインシー。——彼の文体にはマコーレイのそれと共通したところがある。マコーレイの文体は古典主義的であったが、デ・クインシーもそうだ。彼はギリシア語やラテン語に啓発されたが、文体はもっと高い詩的表現に達したローマン主義の散文である。人間がどういう風にして古典的でもあり、またローマン的でもありうるか。これが分らないと英文学において、デ・クイ

ンシーが占める位置も理解出来ない。デ・クインシーの雄弁体、これは古典の規範から些かもはずれず、しかも驚くばかり純粋に、感情的にも想像力の上でもロマンティックな効果を生みだすことが出来たのである。ハーンは古典的、ローマン的その両方に息づく想像力の効果に着眼していたようだ。

テニスン。——ハーンの最も好む詩人であるが想像力においてはどうかであろうか。テニスンには、ひとつの特徴がある。それは彼が想像力を組立てる力が弱いということで、そこが物足りない点である。『王の牧歌』ですら叙事詩にはなっていない。『追憶の詩』は130ほどの詩をひとつの枠に組み入れようとしたらしいが各部の関係がうまくいっていない。彼にはいわゆる構成力がなかった。が、ロマンティズムの詩人の多く、また他の時代の英国詩人も多くはそうだったという。つまり、想像力の構成に言及しており、ハーンの『英文学史』では珍しいことである。

モリス。——彼の題材はすべて中世的なもので、画家のように入念に研究されたものばかりだ。彼はロゼッティ同様、画家であったし、立派な芸術家であった。チョーサーの『カンタベリー物語』をまねて書いた作品『地上の樂園』は成功したものである。モリスの作品にとりこまれた北欧の神話は、まことに新しい効果を生みだした。この異質の想像力形態がどんなに調和よく混っているかは驚くべきことであるといい、ハーンはここで想像力の形態に留意している。

ジョージ・デュ・モーリエイ。——スティーヴンスンの後は、永続的な価値をもつようなロマンスはあまり書かれていない。二人だけ注目すべき人物がいる。一人はキプリング。もう一人はジョージ・デュ・モーリエイ。彼は専門の文学者ではなく画家、それも主として漫画家だった。長い間、『パンチ』誌の主筆であった。彼はある程度、年をとってから、ふと小説を書こうと思った。現代生活のロマンスのようなものを。ハーンはその並はずれた想像力の独創性を問題にしている。

VII

シェイクスピア。——『文学の解釈』の「シェイクスピア」という講義で、ハーンは題材がいかに古くともシェイクスピアの手にかかる、たちどころに新しくなった。天才とは大方、これとみな同じようなことをしてきたというのだが、われわれはハーンの再話文学についても、これはあてはまるのではないかと思う。天才といえ、コールリッジがシェイクスピアを劇的想像力の天才と呼んでいたのが思いだされる。ハーンはシェイクスピアと靈感に触れ、靈感とは誰か他人の思想とか表現が詩人の心に全く独創的な新しい一連の芸術的想像力を喚起することを意味するという。

そして、「シェイクスピア研究ノート」では、シェイクスピア研究は想像力に基づいた研究でなくてはならない。シェイクスピアの劇の研究の最もよい方法は、言葉ではなくて状況を完全に理解しようとする事だ。シェイクスピアの芸術はすべて想像力に基づいており、人間がこれまでに達した最高の想像力の最高の表現であるから、われわれとて彼の芸術を研究するに際しては

想像力をもってなさねばならないのであるという。

なお、『シェイクスピア論』では、ハーンは想像力について次のようなことを述べている。

シェイクスピアは何百という多数の個性のよみがえりである人間のありようをわれわれに想像させてくれる。それはあたかも、男女を問わず彼が数百人の人物であった過去を想いだすことが出来、これらの経験を想像の産物としてではなく、まことの記憶として書きとめていたかのようである。これは「完全な想像力」の働きと呼ばれてきたが、テーヌの謂いなのだ。ところで、完全な想像力とは何か。それは心の中に完全なイマージュを創りだす力のことを意味するという。このハーンの説明はよいと思う。うっかりするとハーンの完全な想像力とは「完全な記憶」のことではないかと取りちがえられる恐れがなきにしもあらずだが、そうではなく、想像力におけるイマージュの重要さ、その創造の意義をちゃんとつかんでいたと思う。ハーンの場合、記憶は想像力の一部であったのである。こうした短い素描でも、われわれはハーンが「想像力」を通して、シェイクスピアをいかに高く評価していたかが、よく理解出来るのである。

VII

私は駆け足で、想像力の西洋における峰の三つ、四つに登り、ついでに英国文学思想史における想像力説について若干触れ、続いてハーンの想像力説が最もよく打ちだされていると思える松江での講演「教育における想像力の価値」より幾つかその特質を取り上げ、次の項でハーンの想像力説の臨床実験ともいうべきものを全く粗雑ながら彼の『英文学史』と『シェイクスピア論』などを通してやってみた。

われわれはハーンが想像力を非常に重視していることは分った。そして彼には想像的傾向が幼年時代から強くあり、それはアメリカで文筆家として立つや論説、随想、紀行文などに現れ、日本で教職についてからも講演や講義、論文、紀行文、再話文学などにおいて絶えず言及されているのを知った。今回の小考はハーンの英文学研究、それも想像という言葉がじかに扱われているもののみに焦点を絞り、数多く集めた用例の中からスペースの都合上、その一部を発表したに過ぎない。

ハーンは周知のごとくローマン主義者だった。したがってコールリッジの想像力説にはある程度言及して然るべきだが、「全身これ心、空想、想像力といった人間」くらいしかいない。あの『文学評伝』にも何んら触れていないので、ハーンからコールリッジの想像力説については、ついに聞くことが出来ない。だが、ハーンが19世紀のローマン的文人であり、スペンサーの帰依者であったことからして、ハーンの想像力説のプロトタイプは多かれ少なかれコールリッジのそれと、スペンサーの進化説に基盤があり、大体において19世紀的ではあるが、メルロ・ポンティ的な面もあるようで、サルトルからは距離があるといつてよい。ハーンは天才であり、稀代の文人、卓越せる教育者であったから、その想像力説のかなりな部分は時代を超えて今日でもハーンという発光体から強い光芒となってわれわれに降りそそいでいるといえよう。